

家庭医の役割と今後の課題

医療法人北海道家庭医療学センター 向陽台ファミリークリニック

院長 中島 徹

「北海道医報」1200号記念、おめでとうございます。まだ開院したばかりのクリニックからの立場ではありますが、日々の診療や地域との関わりから感じることに、僭越ながら述べさせていただきます。

当院は、2017年4月に千歳市の泉沢向陽台地区に開院しました。この地域は、千歳市郊外、市街地から車で15～20分ほどの距離にある住宅地で、1万人弱の人口を有しますが、地域内に医療機関が少なく、幅広い領域の診療ができる医療機関が必要とされ、当院開院の運びとなりました。同時に、千歳市で初めての在宅療養支援診療所として、千歳全域を対象とする在宅医療を担うこととなりました。

今年で開院2年目となり、だんだんと当院が地域に浸透してきていると感じます。当院を利用される患者さんは、「これまで市街地の医療機関に通院していたが、できれば近くの医療機関に通いたい」という方、「ちょっと風邪をひいた」「ケガをした」「腰や膝が痛い」という方などが多く、「近所に気軽に相談できるクリニックが欲しい」という住民の声に応えられているという実感があります。また、在宅医療では、慢性疾患による通院困難、癌および非癌疾患の在宅緩和ケア、難病の診療などが求められています。当院開院前にも、隣町のクリニックや、市内の病院を中心に在宅医療が行われていましたが、市内にあって、在宅医療をメインにやっており、24時間365日対応ができるクリニックができたということで、我々もお役に立てているのではないかと感じています。

地域の活動も活発で、医療・福祉担当者同士の連携の会などに参加させていただいています。今年度からは、千歳の介護医療連携の会に在宅連携部会を設立し、その部会の代表として活動させていただいています。千歳市内ではまだまだ在宅医療は普及しておらず、医療・福祉を担当される方々にも、一般の方々にも、広く在宅医療について知ってもらえるよう活動しています。また、町内会の活動にも参加させていただき、地域の一住民としても馴染んでいければと考えています。

一方で、長く続けられる医療機関であるためにどうするか、という点は課題に感じます。当院は常勤医師2名体制で、夜間・休日の当番を交代で行っております。医師自身の体調不良やプライベートな事情で休みが必要になることもあり、2名体制でも若干の不安を覚えることがあります。願わくは、同じような志をもって働く仲間が増えてくれれば、と思

います。たとえ自分がいなくても続けていける組織であること、それが地域を支えるクリニックとしてあるべき姿ではないかと思えます。また、自分を含むスタッフ一人一人が仕事を長く続けるには、働きやすい現場の環境や、やりがい重要です。自分のやっている仕事が認められ、役に立っていると感じるからこそ、忙しくても「頑張っってやっていこう」という気持ちを保ち続けていられると思えます。そのため、スタッフが活き活きと働くことのできる職場環境づくりも必要となります。同時に、自分自身のスキルアップも重要で、日々進歩する医療の知見を、忙しい日々の中でもアップデートし続ける必要があります。これらは、個人や個々のクリニックとしての努力も必要ですが、システムとしても地域を支える医療機関が運営を維持しやすくなれば、と思えます。

私は、家庭医であることに誇りを持っています。家庭医の大きな役割の一つに、「その地域に住む人たちが安心して医療を受けながら過ごすことのできる町づくり」があると思えます。自分の仕事が地域の医療に、一人一人の患者さんに役立っていると感じられるからこそ、この仕事が好きで、これからも続けていきたいと感じます。私たちの仕事は、一人では続けられません。支えてくれるクリニックのスタッフ、各科専門医の先生方、医療・福祉の多職種の方々の協力があって初めて成り立ちます。皆様に感謝し、私も信頼されるよう最大限力を尽くす。そうして得られる確かな医療を、地域の方々に提供する。そんな関係性を持ちながら、今後もこの仕事を続けていきたいと思えます。

最後に、このようなメッセージをお伝えする場を提供してくださった担当の方々、読んでくださった皆様に最大限の感謝を申し上げます。今後ともご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。